



栄花物語全注釈

四

松村博司

角川書店

日本古典評計・全注釈叢書

栄花物語全注釈 四

全八冊

昭和四十九年一月十日 初版発行

著作者	松まつ
発行者	川村博ひろ
印刷者	中角源じ
製本者	鈴木俊一
發行所	角川書店
会社	株式
振替	角川
東京都千代田区富士見二ノ八	かど
電話 東京 七一二一九二〇八	かわ
郵便番号 一〇二	しょ
（大代表）	てん

落丁・乱丁本はお取替え致します

Printed in Japan

信教印刷・鈴木製本

3395-761014-0946(0)

# 目次

凡例

## 卷第十五 うたがひ

- |                     |   |
|---------------------|---|
| 一 道長太政大臣の辞表を奉る      | 三 |
| 二 道長病気に罹る           | 二 |
| 三 人々転地を勧む           | 一 |
| 四 道長出家、御堂建立の本意      | 一 |
| 五 病氣平癒の祈禱           | 一 |
| 六 道長の述懐             | 一 |
| 七 道長出家              | 一 |
| 八 道長の病氣平癒           | 一 |
| 九 大宮・中宮土御門殿より還御     | 一 |
| 一〇 道長、宮宮に御衣を奉る      | 一 |
| 一一 道長の御堂造営計画        | 一 |
| 一二 御堂造営工事の有様        | 一 |
| 一三 道長は弘法大師・聖徳太子の生まれ | 一 |

五  
頁

八

替り

- |               |   |
|---------------|---|
| 一 道長の受戒       | 四 |
| 二 道長の法華経信仰    | 四 |
| 三 学問の奨励(=)    | 五 |
| 四 四条大納言公任の歌   | 五 |
| 五 学問の奨励(=)    | 六 |
| 六 木幡淨妙寺の創建    | 六 |
| 七 木幡淨妙寺三昧堂供養  | 六 |
| 八 道長の仏事善業(=)  | 三 |
| 九 道長の善根無量(=)  | 三 |
| 一〇 道長の善根無量(=) | 三 |
| 一一 卷第十五 解説    | 三 |

五  
頁

- |                |   |
|----------------|---|
| 一 堀河女御延子の死     | 三 |
| 二 源賴定と元子堀河院を去る | 三 |

1

## 卷第十六 もとのしづく

- 一 堀河女御延子の死

三 敦貞親王と頸光の悲嘆	三 小一条院葬送と法事を指示	三 顯光の述懐	三 顯光の状態	三 顯光の老耄	三 倫子故一条尼上を改葬	三 行成大宰権帥に任せ	三 寛仁四年、疱瘡流行の噂	三 道長阿弥陀堂造営	二 頼定檢非違使別当を兼ね、病により	二 頼定出家、元子も出家す	二 小野宮実資の姫君	二 頼定の薨去	一 頸光、元子と堀河院の領有を争う	一 行成、大宰権帥を辞任	一 道綱病のため出家、薨去	一 源経房権帥に、行成大納言に任せ	一 治安元年、嬉子東宮妃となる	一 東宮と尚侍嬉子の御有様(=)	一 鷹司殿倫子出家	一 経房、大宰府に赴任	一 長家北の方病悩、卒去
西 長家北の方葬送	西 忌中の和歌	西 故姫君の法事	西 左大臣頸光薨去	西 三昧僧都入寂	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛	西 毛		
三 元	三 写(=)	三 元	三 写(=)	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元	三 元		
三 毛	三 臨時の司召	三 毛	三 左大臣頸光薨去	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛	三 毛		

卷第十七 おむがく

- 四  
公任夫妻の哀傷歌  
五  
皇太后宮枇杷殿に遷御  
六  
公任室尼上 小二条殿に移る  
七  
法成寺法華三十講

去

11001

- 法成寺御堂供養の準備  
宮の女房法成寺御堂供養の準備

法成寺御堂供養の準備  
公任妹と北の方の歌

卷第十六 解說

111

- 三九  
四 参会の諸僧(丁)  
五 参会の諸僧(乙)

二九四

四	參会の諸僧(一)
五	參会の諸僧(二)
六	舞樂
七	金堂供養
八	金堂供養後の禄(一)
九	金堂供養後の禄(二)
十	法成寺の夜の有様
十一	一品宮の御様子
十二	三后諸堂見物
十三	阿弥陀堂盂蘭盆講
十四	御堂の後宴
十五	三后還御
十六	卷第十七
十七	解説

- |                                      |                                      |                                      |   |
|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|---|
| 五<br>五<br>五<br>五<br>五<br>五<br>五<br>五 | 元<br>元<br>元<br>元<br>元<br>元<br>元<br>元 | 三<br>三<br>三<br>三<br>三<br>三<br>三<br>三 | 金堂供養<br>金堂供養後の一<br>金堂供養後(二)<br>法成寺の夜の有様<br>一品宮の御様子<br>三后諸堂見物<br>三后諸堂見物<br>阿弥陀堂玉蘭盆講<br>御堂の後宴<br>三后還御<br>卷第十七<br>解説 |
|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|---|

二九七 二九八 二九九 二一〇 二一一 二一二 二一三 二一四 二一五 二一六 二一七 二一八 二一九 二二〇 二二一 二二二 二二三 二二四

卷第十七 角詩

- 卷第十七 解說

三

卷第十八 たまのうてな

- ニ  
一  
尼達の御堂参詣、阿弥陀堂と屏絵  
交野の尼の歌

三三

九	五	四	阿弥陀如來の相好(=)
八	六	五	御堂の北廂、庭の有様
七	七	六	黄昏の御念佛(=)
六	八	七	黄昏の御念佛(=)
五	九	八	尼達の和歌
四	一〇	九	若き人と尼達の和歌
三	二	八	三昧堂參詣
二	三	七	阿弥陀堂懺法
一	一	六	花の尼

### 卷第十九 御裳ざ

七	五	四	尼、里人を案内して諸堂を廻る(=)
六	六	五	尼、里人を案内して諸堂を廻る(=)
五	七	六	尼、里人を案内して諸堂を廻る(=)
四	八	七	倫子御賀と頼子内親王御裳着の準備
三	九	八	朝覲行幸と司召
二	一〇	九	大納言公任初瀬詣
一	一	一〇	卷第十八 解説

一品宮へ贈物  
上達部・殿上人らへの贈物

七	五	四	大宮、田植御覽(=)
六	六	三	御堂万燈会(=)
五	七	三	御堂方燈会(=)
四	八	二	大宮、田植御覽(=)
三	九	一	道長の逆修法事
二	一〇	一	円教寺・法興院御八講
一	一一	一	道長、宇治御八講(=)

九	五	四	大宮彰子へ贈物
八	六	五	御髪上の典侍へ贈物
七	七	六	乳母らの加階
六	八	七	又の日の女房の服装
五	九	八	土御門殿歌会(=)
四	一〇	九	元
三	一一	一〇	毛
二	一二	一一	毛
一	一三	一二	毛

二 土御門殿歌会(=)

三 内大臣教通、大井川御祓

## 卷第二十 御賀

一 土御門殿の有様

皇太后宮姫子、土御門殿行啓

二 中宮威子行啓

女房達の服装

三 土御門殿の庭

六十賀の盛儀(=)

## 卷第二十一 後くるの大将

一 教通室懷妊、三条殿に帰る

教通室男子平産

二 三条殿正月の有様、教通室病惱

もののけの出現

教通北の方逝去

物言わぬものだけ

教通北の方靈の事(=)

教通北の方靈の事(=)

教通北の方葬送

忌中の有様

北の方の夢中の歌

卷第十九 解説

六十賀の盛儀(=)

御賀の和歌

道長七大寺廻り

大宰權帥源経房任地に没す

## 卷第二十 解説

四十九日の法事

教通の好色な性癖

公任夫妻の哀傷

教通の悲傷

法成寺僧房焼亡

道長女隆子、源師房と結婚

脩子内親王御落飾(=)

脩子内親王御受戒

卷第二十一 解説

卷第二十二 とりのまひ

- 一 法成寺薬師堂遷仏の盛儀(一)  
 二 法成寺薬師堂遷仏の盛儀(二)  
 三 法成寺薬師堂遷仏の盛儀(三)  
 四 法成寺薬師堂遷仏の盛儀(四)  
 五 祇陀林寺舍利会(一)  
 六 祇陀林寺舍利会(二)  
 七 道長の法華三十講  
 八 五月五日教通女御匣殿の歌

西 番 番 番 番 番 番

- 九 薬師堂供養と堂内の諸仏(一)  
 八 薬師堂供養と堂内の諸仏(二)  
 卷第二十二 解説  
 補訂・追記  
 略系図  
 事項索引

番 番 番 番 番

## 図版目次

### 口 絵

『石山寺縁起絵』第一巻第三段

### 插 図

梅沢本栄花物語卷第十五巻頭

方四町  
白河・福勝院御堂指図

小南第・阿弥陀堂位置図  
法成寺址標識

法成寺復元推定図  
絵入板本栄花物語挿図

絵入板本栄花物語挿図

戒壇  
正倉院  
ジヨウメンジ墓地入口の現況

淨妙寺想像図  
御菴会  
法隆寺夢殿  
四天王寺龜井

高野山金剛峰寺祖師堂  
六波羅蜜寺  
雲林院  
迎講

梅沢本栄花物語卷第二十巻頭  
『元』

梅沢本栄花物語卷第十七巻頭  
『元』

梅沢本栄花物語卷第十九巻頭  
『元』

梅沢本栄花物語卷第十二巻頭  
『元』

梅沢本栄花物語卷第十一巻頭  
『元』

梅沢本栄花物語卷第十巻頭  
『元』

梅沢本栄花物語卷第九巻頭  
『元』

優曇花 梅沢本栄花物語卷第十六巻頭 二元

胡蝶舞

迦陵頻の舞

帝釈天

飛香舍

華鬘

網代

絵入板本栄花物語挿図

昆明池の障子

万歳楽

賀殿

插頭の花

後撰和歌集卷二十哀傷

梅沢本栄花物語卷第二十一巻頭

梅沢本栄花物語卷第二十二巻頭

大悲觀音

大梵深遠觀音

「僧ども禄給はり……」

絵入板本栄花物語挿図

十二神将

梵天

大日如來

諸天雲に乗りて遊戯し……

秋萩帖

大日如來

梅沢本栄花物語卷第十八巻頭

梅沢本栄花物語卷第十九巻頭

梅沢本栄花物語卷第十二巻頭

梅沢本栄花物語卷第十一巻頭

梅沢本栄花物語卷第十巻頭

梅沢本栄花物語卷第九巻頭

梅沢本栄花物語卷第八巻頭

梅沢本栄花物語卷第七巻頭

梅沢本栄花物語卷第六巻頭

梅沢本栄花物語卷第五巻頭

梅沢本栄花物語卷第四巻頭

梅沢本栄花物語卷第三巻頭

梅沢本栄花物語卷第二巻頭

梅沢本栄花物語卷第一巻頭

# 凡例

## 一 本文

現存最古の完本たる梅沢本（旧三条西家本）を底本とした。

活字に移すに当って、できるだけ底本のかたちがわかるように配慮し、原文に復原することができるよう工夫するとともに、校異を参照する場合の便宜をもはかった。

しかしながら、注釈書として、広い範囲の読者をも予想しなければならないので、理解の便をばかり、次のような校訂の方針を採った。

- 1 底本の仮名を改めて漢字を当て、また反対に、漢字を改めて仮名にしたところがある。ただし、これらの場合、底本の仮名、または漢字は、そのまま振仮名、振漢字として残した。また本行の仮名に振漢字のある場合、仮名と振漢字を入れかえた所もあるが、その場合は語釈にその由を説明した。

(例) 心こころ  
      惟ひと  仲なか  
      これなか→惟仲

      あかつ月  
      ねさせ熱  
      させさせ→熱せさせ

- 2 底本の仮名遣いはまちまちであるが、これを改めて歴史的仮名遣いに統一した。ただし、元の仮名遣いは振仮名として残した。

(例) いとほし  
      をかし  
      まいり

- 3 底本の漢字にすでに振仮名のあるものは、へ／＼を施し

てそのまま残した。ただし、新たに濁点を付したが、仮名遣いは元のままにした。

(例) 敦タケヒト  
      仁ハジメ

      長ナガ  
      良ヨシ

右の場合、底本に押紙して振仮名を施してあるものは、すべて省略した。

- 4 新たに読仮名を付した場合は、「」を施して、3の場合と区別した。

(例) 女フミ  
      親王ミツマタ

- 5 底本の反覆記号(「」)は、次のように改めた。

(例) いささ  
      ささ  
      殿殿のうち

      雄お  
      雄お

- 6 (例) ただ  
      たた  
      三さん

      以上にわたる反覆の場合は、

- 7 (例) あはれく

      のように、底本のままの反覆記号を用いたが、

(例) 返かへ  
      返かへす  
      返かへす返かへ

      のようないふは、二字反覆に準じた扱いをした。

- 8 「東宮」と「春宮」、「武部卿宮」と「武部卿の宮」、「小野宮」と「小野の宮」の類は底本のままとし、統一することをしないが、次のような場合は新たに助詞・活用語尾等を補い、右傍に・印を付し、それが補つたものであることを明らかにした。

- (例) 世の中 一の宮 北の方  
吹く風 給ふ 申しし 思ひやる  
ただし、「給て」「たまて」「給ける」「たまける」「給し」  
「たまし」等は、タマヒテ・タマウテ・タマッテ、タマヒケ  
ル・タマウケル、タマヒシ・タマウシ・タマッシ等のうち  
どのようによんだのか明確にし難いものがあるので、例外  
として底本の表記のままにした。また、「侍り」について  
は、「侍なり」「侍めり」のよう、聴覚推量や視覚推量の  
語に続く場合は、ハベンナリ・ハベンメリと撥音便によん  
だものと思われ、類似のものとして、「あり」「なり」  
「べかれり」……の類があるが、これらもすべて底本の表記  
のままとした。
- 7 変体仮名はすべて通行の字体に改めた。ただし、「見」の  
ように漢字として用いてあるのか、仮名として用いてある  
のか判別に困難なものの類は、仮名あるいは漢字として適  
当に扱った。
- 8 古体・異体・略体漢字は、当用漢字になるものは新字体、  
その他は正字体に改めた。
- 9 底本には改行による段落がほとんどないが、読解の便を  
考えて適当に段落を設けた。また、和歌は底本どおり改行  
した上、二字下りにしたが、底本では列記した和歌以外は  
和歌の終りから直ちに地の文に続いて書いているのを改め、  
和歌だけで一行にした。
- 10 底本には朱勾点が施されているが、これを省略し、新た  
に句読点・濁点を付した。
- 11 読解の便をはかり、次のような括弧を用いた。

(例) 「 」会話  
「 」会話の中にさらに会話のある場合  
「 」心内語（心中で思っていることを示す）

## 二 校訂（校訂）

1 底本では、字句を補入した場合は、大体補入すべき字間に  
に。符号を付し、その右傍に細書しているが、本書ではそ  
れらを（ ）を付して本行に組入れた。また、底本の仮名  
に漢字を当て、もとの仮名を振仮名として残した場合、も  
との仮名に補入のある時は、

(例) 奉<sup>たゞま</sup>り 笛<sup>かのう</sup>火

のように、振仮名に（ ）を付した。

## 2 底本に不備があり、他本を参照して字句を補つた場合に

は、「 」を付した。また、底本の字句を改めた場合には、  
該當箇所に\*印を付し、いずれもその理由を校訂に記した。  
、は見せ消ちを示した。

## 三 校異（校異）

校合異文として、西本願寺本・陽明文庫本・富岡家旧藏甲本・  
同乙本の四本を選び、語句の異同をことごとく掲げた。この  
場合、見出しには底本の原文を示し、諸本の異同をその下に  
挙げたが、本文との対照の便宜上、一節ごとに、1・2・3  
……のごとく一連番号を付した。この校異は、原則として語  
句の異同にとどめ、必要と認めたもののほか、仮名遣い、仮  
名と漢字の相違等は省略した。

## 四 諸本の略号

西本願寺本

陽明文庫本

富岡家旧蔵本（甲・乙二本がある）

ただし、右の場合富岡家旧蔵本については、甲本乙本間に語句の異同のある時に限り、

富岡家旧蔵甲本

富岡家旧蔵乙本

のごとく区別し、両本がまったく一致するか、あるいは単に仮名と漢字の相違、または僅かな仮名遣いの相違に過ぎない時は、略号<sup>富</sup>とし、その本文は甲本によって掲げた。ただし、仮名遣いの相違等でも、意味に關係するような時は、まず甲本の本文を示し、・印を付した部分だけが、「」内のそれに該当する乙本と相違することを示したような場合もあり、なお説明を要する場合は、これを<sup>校異考</sup>において行なつた。

#### 四 口訳（口訳）

なるべく原文に即した逐語訳を試み、本文訳解の参考に資することを主とし、必ずしもそれだけで独立した読み物として完成されたものではない。（）を付して語句を補つたところや、原文の文脈のままでは現代語になりにくいような箇所は、語句の順序を変えたり、意訳したような所もあるが、最少限にとどめた。また、敬語は、単独、二重敬語、三重敬語等があるが、これを一々厳密に区別して訳出することは困難でもあり、現代文として煩瑣に過ぎることにもなるので、適度の範囲にとどめることにした。

なお、口訳のはじめに、新たに標目を付して、内容の検索を容易ならしめた。

#### 五 語釈（語釈）

主要な語句の読み・意味等について記したが、そのほか、文

脈・文法的説明・有職故実的事項の解説・史料の引用・出典等かなり広範囲にわたっている。特に語彙の意味については本書自体の用法に即して述べるよう努めるとともに、有職故実的事項についても同様の配慮を払った。文献を引用した場合、漢文には句読訓点を付したが、つとめて仮名交り文に書下した。原文の割注は、「」を付して一行に改めて書下し、新たに筆者の加えた私注には（）を付した。その他、單行本またはそれに準ずるものには『』、研究論文には「」を付し、巻名には「」を付して区別した。

#### 六 校異考（校異考）

<sup>校異</sup>に掲げた、底本と諸異本の異同のうち、その主要なものと取上げて、異同の生じた理由や本文の性質・良否等についての考察を記した。概して底本と富岡本との異同が多いが、富岡本は原本とは別に、改修の手の加えられたものとする筆者の立場からの考察になつていて、番号を付した見出し語によつて、本文並びに校異欄と対照できるようになつてゐるが、見出し語は校異の前後に及んでいる場合もある。

#### 七 勘物（勘物）

底本の勘物には、目次的性質を有するもの（標目）と、注的のもの（傍書）とがあるが、これらを各節ごとに分割収録し、漢数字を付して原位置がわかるようにした（細注は「」を付し、補入は（）を付して区別した他、新たに筆者の私考として「」を付して解説を加えたところもある）。ただし、單に人名の注記であるようなものは、これを底本のまま本文の該当箇所に収めた。この場合底本の注記に誤りあるものは改めた他、削除した場合もあるが、その由は<sup>翻訳</sup>において断

わった。また、筆者が新たに補った人名注には「」を付して、本来底本にあるものと区別した。

### 八 補説(補説)

〔語釈〕において詳しい解説のできなかつたものや、その節で特に問題となるような事項、たとえば史実と虚構の問題、史実と記述の年次の乖離等、その他関連のある人物の逸話や記述の特色等、できるだけ本書の特質を理解する上有効と思われるような点に配慮することに努めた。

九 本文の理解・鑑賞のために、地図・插絵・写真を多數插入した。插絵は特に、江戸時代に刊行された絵入九巻抄出本と称せられる『栄花物語』の插絵を悉く収録した。

一〇 本書の著作に当つて、終始参照したものは、  
和田英松共著『栄華物語詳解』明治書院 明治四〇年刊  
佐藤球共著『栄華物語詳解』明治書院 明治四一年刊  
岡本保孝著『栄花物語抄』(国文注釈全書) 明治四二年刊  
の二著であるが、その他隨時参照したものに、  
冷泉為恭著『校註栄花物語』未刊 明治三年成  
小中村義象  
關根正直共著『標註栄花物語抄』弦巻書肆 明治二四年刊

佐野久成著『栄花物語標註』未刊 明治二四年成  
与謝野晶子著『新訳栄花物語』金尾文淵堂 大正四年刊  
岩野祐吉著『栄華物語詳解補註』賛写印刷 昭和三〇年刊

等があり、新しく全訳として、横山青娥・横山寿賀子共著『現代語版栄花物語』(昭和44年塔影書房)、抄注として河北騰著『栄花物語新註』(昭和45年笠間書院)が近刊された。

また、それぞれの項目については、先学はじめ諸家の研究に負うところがきわめて多く、お名前を明記した以外にも、中

田祝夫編『新選古語辞典』、金田一春彦編『新明解古語辞典』等辞典類をはじめ拠り所とさせていただいた所もまたきわめて多い。特に第四巻は仏教用語が多いので、藤井宣正著『仏教辞林』、中村元監修『新・仏教辞典』、織田得能著『仏教大辞典』、『国文学十二種仏語解釈』その他の恩恵を蒙ることが多かった。ここに記して深甚なる感謝の意を表する次第である。

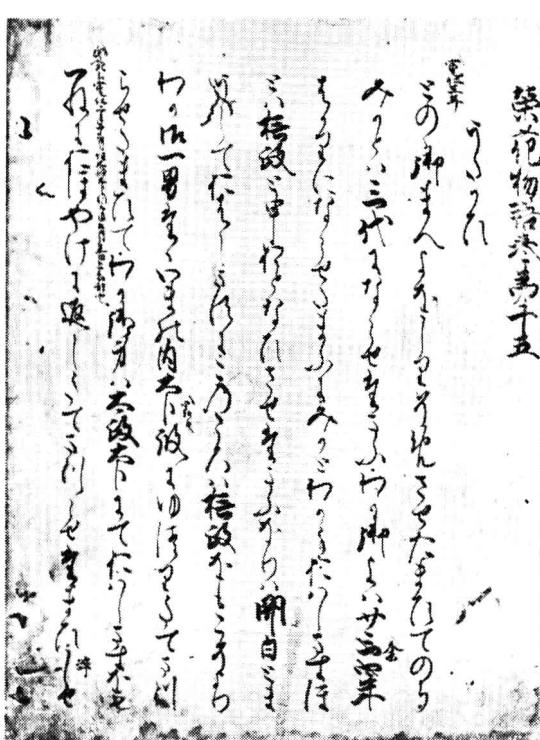
### 一一 訂正

執筆にあたつては最善の努力を払つたが、誤植や失考についてはできる限り次巻において訂正するように努める。



栄花物語卷第十五

葉



262 梅沢本『栄花物語』卷第十五 くうたがひ 卷頭

栄花物語 卷第十五

うたがひ

